

空



2005年
SORA 9号

晴夜 (9) | 3

柴田 佐知子

枯菊を焚きてやさしき四辺かな

父の餉の刻を正しく冬至梅

風垣に家をしづめて出漁す

水仙や漁師の一語づつ強し

玄海の寒鯛届く相撲部屋

孕み鹿煙のやうな雨に立つ

出漁やすでに明るき雪柳

寺巡る声を抑へて梅の花

善人となつてしまひし日向ぼこ

獺
人

青 山 悠

僧籍の教師に出会ふ菊日和

水仙や主よりも高き殉教墓

枯山河苾に白亜の観世音

狐罨かけて眠りの浅かりし

裏作の絶えたる村や冬雲雀

同齡と言へば親しき日向ぼこ

・獺・

講談社版『大日本歳時記』繰るたび「獺魚を祭る」の欄に載っている小川芋銭の「祭魚」の絵に目が止まります。すつくと立って、かかげ持った魚を祭る獺の可愛らしい姿に心惹かれるからです。

獺といえば思い出すことがあります。宇美線に蒸気機関車が真っ黒い煙を吐いて走っていた大正の終りごろの話です。

多々良川の中流に私が通っていた大川尋常小学校があり、そこを少し下ると流れは左にゆるやかに曲がり川幅がやや広くなります。土手の片側は笹藪が続き、川に沿う淋しい村道からは川面は見えませんでした。この村に村会議員や区長などを務めていた駒吉という投網漁の名人がおりました。ある濃い霜がかつた早朝のことです。いつも

癒え遠き病を守りて年暮るる

初東風や卵生みたる鶏のこゑ

寒木瓜の赤く暮れゆく喪正月

冬萌のうすき日向や人悼む

降る雪や光背失せし観世音

こんこんと叩く大樽寒日和

火の色に暮るる玄海初不動

魚屋の紺の前垂れ春近し

耕人にまた一輛の電車過ぐ

のように霏で濡れたような笹藪をかきわけ川原に下りてゆくと、水際に金太郎のような腹掛けをした幼い男の子がひとり遊んでいるのです。家には同齡くらいの孫がいる駒吉じいさんは、夜もまだ明けきらぬ淋しい川原でのこの光景を目にして、えも言われぬ戦慄が背筋を走ったそうです。ひとり遊びのその幼児は、駒吉じいさんの姿に気付くと、何も言わず、振り返り振り返り、よちよちと濃い朝靄の中へと消えてゆきました。その日以降、駒吉じいさんはきつぱりと投網を止めてしまいました。村人たちは「それは癩ばい。もう殺生は止めてもらえんじやろうかと、化けて出てきたとたい。」と話しておりました。

日本の癩は高知県西部以外では絶滅したという記事を読んで随分経ちます。癩が魚を祭れる川原はどこかに残っているのでしょうか。

魚祭る癩の手思ふ晴夜かな

柴田佐知子

ぼんやり

秋 千 晴

公園の釣瓶落しの三輪車

仁比山をまとうてみたし紅葉狩

ぼんやりと八ツ手の花のひと日かな

虎落笛人閉ぢこめて索々と

水仙の右左より香りくる

本家より万両もらふ大安日



長寿の心得

人生は六十から

一、七十才でお迎えの来た時は

只今留守と言え

夫は

恵方へと向きて菩薩を彫り始む

初雀何の種やら落しゆく

七種に土の匂ひの強かりき

裏鳥居上げたる石に齒朶生えし

狛犬の脚の大きく冬ぬくし

大根に買物袋歪みたる

寒椿この紅欲しと鳥の来し

水仙に寝起きの顔を見られけり

翼のやうに園児らは春野ゆく

一、八十才でお迎えの来た時は

まだまだ早いと言え

一、九十才でお迎えの来た時は

そう急がずともよいと言え

一、百才でお迎えの来た時は

頃を見てこちらから

ボツボツ行くと見え

気はながく

心はまるく

腹たてず

口つつしめば

命ながらえる

合掌

昨年博多座へ行つた時、娘達が見つけて主人にプレゼントした手拭に染め抜かれていたものです。

早速娘は、後の五行をプリントして目に付く所に貼り、またラミネートして主人のランチマットも作りました。

甲斐あつてか先日主人の姉が来宅した折、「気が」長くなつたね」と感心していました。

隙間

あさなが捷

銀漢を渡りゆくなり観覧車

捨てきれず愛せず蛇の穴に入る

肩寄せて何かうれしき日向ぼこ

誰よりも大きな熊手酉の市

初漁の縁起物とていただきし

枕辺に春著たたみて眠りけり

・奉公人請状・

締切りが過ぎたというのに、テーマが決まらず、私は悶々としていました。窮余の一策として、以前「養育御頼み申し候」という奉公人請状があると聞いたことを思い出し、その文のコピーを依頼しました。すぐにたくさん資料と共に、丁寧な解説が送られてきたのですが、目を通したとたん、私は自分が嫌になりました。

その請状は、天明五年（二七八五）おきという八歳の娘が、信州追分宿の



今日のこののみを考へ大根引く

冬の薔薇ねじれし氣持もて余す

その隙間埋められずして足袋をはく

もがり笛島の灯りは海に添ふ

足踏み鳴らす子に凧の糸渡す

皺の手を隠さず海女の目も笑ふ

消息の絶えし友あり花なづな

夕闇の底に落椿のみ赤し

待たさるるはいつも我なり蔦若葉

旅籠に飯盛り女として、年季二十一年という事実上永代売され、金二朱（約一万円）の身代金を受け取る際に書かれたもので、氣に入らなかつた場合、「蔵替」つまり他に売つてもかまわないうといきわめて劣悪な条件のものでした。

更に、その資料は、現在もなくならない貧困などにも言及されていて考えるべきことが大きく、多すぎることに氣付かされたからです。

「小兒養育の御慈悲相願ひ進上申す」という文を引用して、餓死させるよりはと、生き延びさせるため売り渡したのであります。いつの時代も形はどうであれ、子を思う親の氣持ちは変わらないものです。というくらいにまとめようと安易に考えていた自分を恥じました。

いただいた資料は何時かきちんとした形にして発表しなければ、と考えています。

花

小林 朱夏

マフラーに首をうづめて肯定す

綾取りの糸の結び目固くなる

家系には酒乱がみたり赤海鼠

恰土富士の黒く座れる松納め

大寒の軋みて黒き生家かな

春雷や染色されし脳細胞



朝寝して一人にされし日曜日

田楽の串を並べて笑ひ合ふ

あたたかや横には振らぬ鳩の首

全身で鳴いて雲雀の宙にあり

年ごとに欲深くなる臃かな

春塵の碁盤に降りて父のこと

遠景は母郷と重なり夕桜

御開帳金の仏に山の幸

父逝きてより花に酔ふ母の居り

ばさばさに乾いてゆく心を

ひとのせいにはするな

みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを

友人のせいにはするな

しなやかさを失ったのはどちらなのか

駄目なことの一切を

時代のせいにはするな

わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい

自分で守れ

ばかものよ

右の詩は茨木のり子さんの「自分の感受性くらい」です。二〇〇五年の手帳の一言に書き込みました。折りにふれ、読み返すことと思います。

さて、最近の感動←電動歯ブラシ・最近の失敗↓頂いた年賀状紛失・最近の読書↓「沈黙」「海と毒薬」以上です。